

地域の祭りにおける仮面の役割

倉石あつ子

1 仮面を目にする機会

仮面はイスラム圏を除き世界的な分布を見せるが、その形態は顔だけを隠すもの・頭まで被ってしまふものなど、仮面が何のために用いられるかなど、目的によって多様である。筆者は仮面について専門的に研究しているわけではないので、本稿では日韓における仮面を用いる祭りを紹介し、仮面の持つ役割について若干の考察を行いたいと思う。日韓における仮面はほとんどが顔を隠すために用いられるもので、頭部まで覆ってしまふものは少ない。田耕旭は仮面の発生を原始社会に求め、「いくつかの宗教儀式から神霊・悪鬼・妖怪・動物などに仮装し、呪術を行う」ために発生したと規定している¹⁾。

仮面といえは二つの機能を思い浮かべる。一つは顔を隠すこと。「仮面舞踏会」のように、顔を隠して自分を特定できないようにすることを目的とする、いわばねずみ小僧のほっかぶりや御高祖頭巾・深編み笠などと同じ機能を持たせることを目的としたものである。もう一つは仮面をつけることによって仮面が表現する者となつてその特性を表象する儀礼的行為である。村祭りなどにおける神楽面・獅子・能面などがすぐに思い出される。跡見学園女子大学のある新座市にも、野火止神楽など十数種類の仮面を使い分ける神楽が現在まで伝えられているし、中野獅子もよく知られている。こうした各地に伝わる祭りで見られる仮面は、よほどの機会にめぐまれてもしない限り、そう幾つかの祭りを比較することは出来ない。むしろ、見ようと思つてすぐ目に見えるものは、能面などの芸能化されているも

のであろう。

例えば、能の「羽衣」は、三保松原の砂浜で、白龍という名の漁師が松の枝にかけられた美しい衣を見付け、すばらしい宝物だと喜んで持ち帰ろうとする。すると、どこからともなく現れた天女が「私のもの」なのでお返しくださいと懇願する。断った白龍に、天人の舞を舞って見せることを条件に羽衣を返してくれるよう再度懇願する。天女は約束どおり、羽衣をひらひらと翻しながら、素晴らしい舞を舞い、やがて天へと帰ってゆく、という「羽衣伝説」を基にした物語とともに、その衣装の美しくさがよく知られている演目の一つである。写真1は「羽衣」の一場面。天女が返してもらった羽衣をまとい、優雅に舞



写真1 羽衣



写真2 翁



写真3 安達原の鬼婆
写真3では普通の老女。



写真4 4では本性を現した
鬼女となっている。



写真5 「養老」に表われる山の神

いつつ天に帰っていく場面である。柔らかな表情の女面は、一目で若い女を思わせる。

天下泰平・五穀豊穡などを祈念する儀礼としての演目である「翁」(写真2)、山中に迷い込んだ山伏一行が泊めてもらう宿を借りた主が実は鬼婆だったという「安達原」(写真3・4)、「養老の滝」伝説を基にした「養老」では滝の水を管掌する山の神(写真5)が登場する。こうした面は勿論、面をかぶることによって生身の人間の顔では表現できない鬼・老婆・老人・神などを表現することが出来る。仮面の出来具合によって、見る方向や光の加減によって一つの面が幾つかの表情を演じ分けるといわれている⁽²⁾。こうした能面は私たちの都市生活者

の生活においては、もつとも身近にある仮面の一つといつても過言ではないが、実際には「能」を鑑賞する機会はそう多くはなく、美術館等での美術展示品として目にする機会がある程度である。普段の生活の中で我々が面を被るということはほとんどなく、子供が保育園や幼稚園の節分行事などの折に、鬼の面を作つて持ち帰り、それを被つて豆まきをするくらいのものであろう。子供の遊びといつてしまえばそれまでだが、面を被つた者を鬼に見立てたとき、その面は「鬼」という私たちの生活にとつて好ましがらざる存在領域にいるものとして認識され、それに向けて豆が投げつけられる。面を被ることによって、それまでとはまったく別の人格あるいは機能を持ったものと認識されるところに、仮面の特色があるといえる。

少々かけ離れた事例をあげたが、次節では実際の暮らしの中で仮面が用いられる祭りを例に、「仮面」のもつ意味・機能を考えてみよう。

2 長野県阿南町新野の雪祭り概要

長野県阿南町新野はかつて千石平と呼ばれ、飯田以南ではも

つとも大きな盆地である。近在の農村集落の物資の集散地として栄えた。経済的な中心地としての機能と同時に、雪祭り・盆踊りが現在まで伝承されている地域としても知られている。いわゆる三信遠とよばれる、三河・信濃・遠江に国境を接する一帯には、田楽系の民俗芸能が伝承されていることは周知の通りである。新野の雪祭りもその一つであるが、そのほか新野が所屬する行政区である阿南町には、早稲田人形芝居、日吉のお餅祭り、深見の祇園祭り、和合の念仏踊り、新野の盆踊りなど県あるいは国レベルの選択や指定文化財クラスの祭りがムラ人の手によつて守られている。新野の雪祭りも、国重要無形民俗文化財に指定され、ムラはずれにある伊豆神社で、一月一四日夜から一五日にかけて行われている。寒い・眠い・煙いという三拍子がそろつた祭りといわれ、夜を徹しての祭りに参加するあるいは見学するものたちは、三拍子を克服しなければ祭りの醍醐味は味わえない。

二〇〇七年、二十数年ぶりに訪れた新野のムラは、一見、かつてと少しも変わっていないように見えたが、新野に辿りつくまでの道である飯田線温田駅からの県道151号線は車幅が広がると同時に、曲がりくねつた上り坂は少なくなりトンネルな

ども開通して、このムラも車社会の只中にあることを実感させる。その分、くねくねした道をゆっくり登り、峠を上りきった先に開ける新野盆地の意外な広さに、感動したかつての経験はこのたびは感じる事が出来なかった。また、ムラの中には道の駅、農村文化センター・歴史民俗資料館が建てられ(写真6)、人々の暮らしが展示されている。「里人の自然を慈しむ心が、農村生活に根差した貴重な民俗芸能を育んできました」と展示の主眼を主張しているように、厳しい山国の自然を自分たちの生活の一部として取り込んできた人々の思想が、祭りを維持し続けてきたことが理解できる。もちろん、そこに暮らす人々の正月の過ごし方も、余り変化が見られないように思われ、かつての調査の折に「便所の年取り」⁵⁾を行っていたA家は現在でも継続して行っているといい、家の入り口の松飾も小正月のハザユイ(写真7)がしてあった。

祭りの起源は、鎌倉時代に伊豆の伊東小次郎が流浪の末に新野にたどりつき、奈良の春日神社に奉仕していたことから薪能(たきぎのう)を伝えたことに起源を求める説や、室町時代に生国伊勢からやってきた関氏が、田の神送りを伝えたことに起源するなど諸説があり、起源は特定できない。雪を稲穂の花に

みたて、一握りの雪でも神殿に供えるとその年は豊作になるといわれ、新野に雪がなければ近在を探しても供えるものとされている。「雪祭り」と呼び始めたのは折口信夫といわれ、それまでは「二善寺の御神事」とか「田楽祭」などと呼ばれていた。民俗学界では、折口信夫が一九二六年にいち早くこの祭りに注目し、見学に訪れた。「日本の芸能を学ぶものは、一度見ると必要のある祭り」と言ったとされ、民俗芸能研究者はこの祭りを見るところから芸能研究がスタートするとも言われている。折口がこの祭りを見学するために新野を訪れたおりの話は、昭



写真6 農村文化センター



写真7 ハザユイ

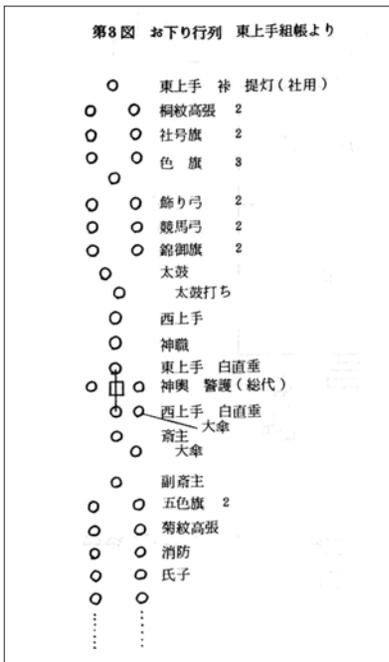
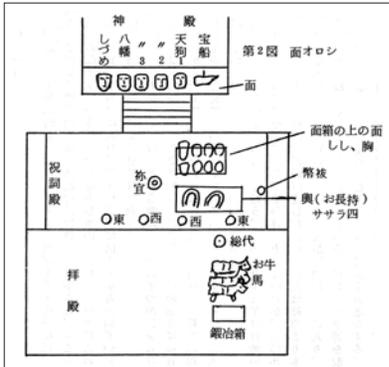
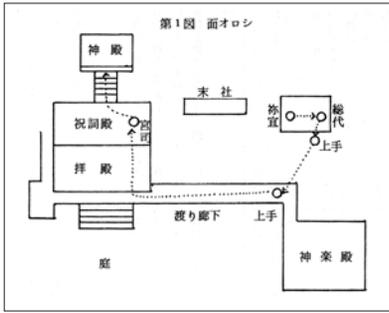


図1・2・3 猪切智義

作られ、以後はそこから拜殿に移すようになった。その動きは猪切智義が『新野民俗誌稿』において図化しているの
で、以下に掲げておく。(図1)
こうして神庫から出された面は神殿および祝詞殿に図2のよ
うに並べられる。お祓いをした後、面は面箱に納め、更に長持
ちに納めて、諏訪神社へおくだりをする。

お下り＝一日、夜が明けるころ(六時頃) 図3のような行
列を作って伊豆神社から諏訪神社へおくだりをする。沿道
の家々は次の家までの間を塩水で清める。祭りの諸道具を

運ぶ役は、部落順に何名と割り当てる。

面開き＝諏訪神社に到着すると、諸道具を拜殿に置き、禰宜
が面箱を取り出し、拜殿の小部屋にある面棚に並べ、お神
酒・水・塩を供え、一同神前にてお年取りを行う。この間、
社務所の受付では後立・市子の受付が行われる。また、こ
の夜は舞の役を募り、禰宜が神くじでその役を決める。そ
して、役が決まると決まった役の人がしょつきり・海道下
り・神婆・天狗・八幡・しづめ・田遊びなどを次々と舞う。
これを田遊びといい、本祭りに備えての試験的な舞ともい

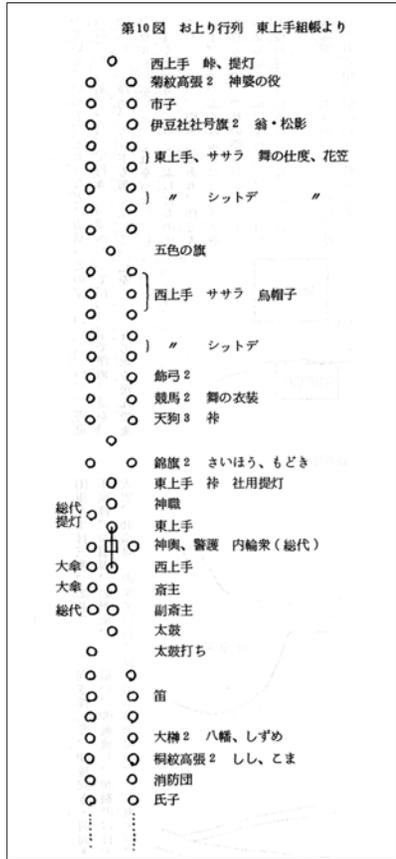


図4 猪切智義

えた。

・一月二日 諸役が伊豆神社・諏訪神社双方に集まり、本祭りに使用する諸道具（各役が使用する灯笼・大松明など。大松明は各家の正月の松飾を集めて作る）の準備を行う。さいほう・もどき・競馬・天狗はそれぞれ自分が使用する道具の手直し等を行う。

・一月三日 祭りの奉仕者全員が諏訪神社に集まり、お滝まで行って禊を行う。その後、神前の座につき、東西上手より一四日の祭りについての諸注意が行われる。その後、役舞の

大松明に点火されるための水晶玉によって太陽から採火されたという火が提灯に入れられ、その火を先頭にしておのぼりの行列が生まれ、伊豆神社に向かう。その行列は図4のとおりである。この行列の先頭に立つのは市子であり、市子がいなければ行列が組めない。伊豆神社に到着した面は、庁屋と呼ばれる社務所の一角の部屋に納められ、役舞の支度の準備もここで行われる。

こうして、祭りは十数日をかけて準備がなされ、村人たち全

輪舞が行われる。神殿の扉を開き、「まんざいらく」を唱えて拜む。更に、全員ふくみ紙をして面の化粧が行われる。紐がしつかりしているかなどもこの折に確認される。最後に競馬役が馬をつけずに弓矢を持って舞い、白酒が振舞われる。

・一月四日 午後二時ごろ祭りの奉仕者は諏訪神社に集合し、小正月の年取りを行う。これを鹿嶋立ちと呼んでいる。

これが終わると、おのぼりの準備を行う。

員によって支えられながら行われるのである。祭りの奉仕者として祭りを支えることは言うまでもなく、役舞を申し込み神くじにあたるのが人々にとっては名誉なことと考えられている。後立（ごだつ）は五・七・九・一一・一三歳などの奇数年齢の男の子が初めて祭りに奉仕することを言うが、このように幼いときから祭りに参加することによって、祭りに対する思い入れも形成されることになるのである。市子も同様で、奇数年齢の少女が応募する。市子は前述のように、おぼりの先導役を務める重要な役目を担っており、市子をつとめた経験を持つことはその女性にとつて、生涯誇りとできるものであった。現在もその意識は薄れておらず、本人は勿論、家族もその役をつとめることを望んでいる家が多い。

なお、祭りにおける物忌みは厳しく、不幸のあつた家はブクがかかっているといい、祭り見学の客のもてなしもその家の者が触らないよう、もてなしのために酒肴を勧めても、実際に徳利を取つて客に酒を注ぐようなことはしない。そうしてしまつたと、客にも穢れが移り、客も祭り見物が出来なくなつてしまふというのである。その徹底した穢れ観・清浄観を保つとつ意識が、現在でも「お滝入り」などを伝承する意識につながつ

ているのであろう。ブクのかかったものは近親者の場合一〇〇日、親戚の場合三十日といわれている。そのほか、生理中の女性・四足を食べたものも参加してはいけないといわれている。

3 仮面の登場

新野の雪祭りは、神事であり祭りに参加するものは物忌みの生活と裨が義務付けられており、それを支える村人たちの生活もそうしたことをよく踏まえた上でなされていることは、前述のとおりである。したがつて、祭りに奉納されるいわゆる民俗芸能も、神事の一環として認識され、出し物の順番、演じ方などは口伝によつて伝えられ、それが守られている。村の人々はこの民俗芸能を「舞う」という言葉で表現している。そして新野を初め三信遠の「舞」の多くが仮面を用いるところに特色があるといつてよいであらう。その仮面に対する扱いは、二節で述べたように非常に丁寧であると同時に、格付けがされている。面開きの扱いを見ると、その格付けは、「舞」の中で何が最も重要と人々が認識しているかによつて、異なっていることが判る。「舞」を見ることにより、雪祭りの本質が何かを

知ることができるともいえる。では、その雪祭りにおける民俗芸能は具体的にどのような内容であり、面は其中でどのような役割を果たすのかをみていきたい。祭りは本殿の儀と庭の儀にわけられ、見物人と一体になって行われる庭の儀を指して人々が集まるが、いちおう本殿の祭りから見えていくこととする。

本殿での祭りが開催されるに先立ち、もどき役など役舞をする者達が五人から九人で本殿の裏山にある伽藍様^①にお参りする。供え餅九個と酒一升を持って行き、伽藍様の祠の扉を開け、お供えをした後、唱えごとをし「順の舞」を奉納して、持参の酒を残さず飲んでしまい餅をわけて後ろを振り向かずに戻る。闇の中、提灯をもって行くのみである。この「順の舞」の楽の音を聞いてからでないと、本殿の扉を開けてはいけないといわれている。こうして本殿の扉が開かれると、例祭の神事が行われた後、市子・後立の万歳楽が行われる。別名、仏の舞・扇の舞とも呼ばれ、このときのみ両手に中啓を持って舞われる。こうして本殿の舞が終わるころになると、見物人は庁屋の板壁を棒切れなどで叩きながら「らんじょう らんじょう」と叫ぶ。大松明が立てられ、点火が終わるまでこれが続く。このころ、最初に舞うサイホウとモドキは御手洗で禊を行い、本番に

備えている。一方、庭では大松明に恵比寿・大黒を乗せた舟をつるした綱がとりつけられ、点火の準備がされる。いよいよ点火が行われる寸前に、八人のササラ役が団扇と竹笹を持って飛び出し「やーやー らんじょう らんじょう」と呼ばわりながら、松明のまわりを九回かけ回る。この松明への点火が夜の一時ごろで、ここから祭りの本番となる。

松明に点火されるころを見計らって、最初の舞者であるサイホウ（幸法）が庁屋の入り口に顔を出し、舞が始まる。

①サイホウ（幸法）

道祖法とも書く。社掌だけが担当したという重要な役で、他の舞人が庁屋で支度するのに対し、この役は神殿で行い、禰宜・上手頭人に付き添われて庁屋に行く。庁屋で面開きをし、自らも面をつける。穏やかな面形で、藁製の先の長くとがった冠を被る。片手には長い柄の菱形団扇をもち、片手には松の枝をもっている。腰には男根状のホッチョウをさしている。サイホウの面及び支度を三隅治雄は一種野の精霊を思わせる異様な風態と形容している。人々の幸せや豊作・安産などを祈る。ホッチョウを見物人に擦り付けることによって、見物人の無病息

災などを保障する重要な舞である。若い女性にホッチョウをすりつけ、安産や妊娠祈願のまじないもする。いわば幸せを運ぶ好々爺然とした神様といえる。九回序屋から出てきて舞うので、一時間あるいはそれ以上に及ぶ長丁場を勤めることになる。九回目はササラ八人を従えて出て来る。ササラが舞っている間に、火被え・餅あぶり・冠ほめ・刀ほめ・大松明の火あおりなどを行う。

なお、祭りの見物人は少しでも舞人の近くに寄ろうとするが、天狗が小松明を振り回して舞の場を広くするよう会場整理を行う。見物人の輪が縮まってくると天狗が松明を振りかざして、場を確保するという繰り返し祭りの間中行われる。

②モドキ（茂登喜）

サイホウと同じことをもどくが、面はサイホウに比較して、目と眉が吊り上った怖い顔をしている面である。足のけりなどはサイホウ



写真8 サイホウ



写真9 モドキ



写真10 キョウマン

と反対である。七回出たり入ったりするが、七回目に新座のササラ八人を従えて出てくる。太鼓叩きと笛吹きは面をつけている。笛吹きは逆さ笛に構えており、七回目の最後のほうで舞う「蹴放ち」と呼ばれる躍動的な舞のとき、ササラと合わせようとするのだが、よく合わない。モドキは笛吹きの笛を奪い取り、自分で吹き太鼓も足で蹴り上げるといふ乱暴な行動をとる。面形もサイホウよりきつい表情であり、あくまでもサイホウをもどく神であり、本物のサイホウにはなりきれない。

写真11・12
オキナ



写真13・14 夜流れ餅

③キョウマン（競馬）

雪祭りにおける花形の役といわれている。作り物の馬に乗り、日月の紋を付けた長烏帽子を被り、二人で向き合って行う舞である。この舞は素顔で面はつけないが、日の紋が一の馬、月の紋が二の馬と決まっている。二頭の馬が鼻合わせで横に飛びながら舞うのが特色といわれ、「馬の横っ飛び」を見なければ新野の雪祭りを見よとまで言われている。最後に鬼役の持つ的に向かって矢を射る。悪霊退散の意味と、矢が的を射ると豊作といわれる流鏑馬を意識した二つの意味をこめた舞といえよう。

④オウシ（お牛）

宮司が舞うことになっている。キョウマン同様、牛の作り物に乗って素顔で舞う。最後に拝殿の棟に向かって「近江の湖」と叫びながら矢を放つ。反対方向にも同じことを行った後、矢を後ろに投げて庁屋に入る。矢は屋根に放つとも言われている。

⑤オキナ（翁）

頭に赤い布を巻き、翁の面を額にあてて、しろの上着・手には扇を持って出てくる。拝殿の階段を上ったところで、翁の詞



写真15 ショウジキリ



写真16・17 カイドウクダリ

章を唱える¹⁰。介添えが一人ついていて、「花ことば」を入れる。この間に、寄進者から届けられた「夜流れ餅」が祭りの奉仕者に配られる。

⑥ マツカゲ（松影）

翁の面と同じような面をつけたものが、翁と同じ場所で「松影」の詞章を唱える。その詞章は翁が宝かぞえであったのに対し、「御社おがまば今御当社」と唱えつつ拝殿に上り、諸国の神々の名を読み上げる。いわば、神迎えともいえる詞章である。

⑦ ショウジキリ（正直切 正直翁）

翁の面を額につけ烏帽子をかぶった者が、御拜で控えのものと問答をする。翁・松影に比較するとぐつと碎けた問答を拝殿近くの庭で行う。控えの「何者か」という問いかけに自分は日本中の宝物を数ぞえ参らす翁だといい、めでたいこと・おかしなこと・おもしろいこと・食うことでも「申そうか」といって、正月の七草を皮切りに、十二ヶ月の景物を述べ立てる。話を一転させて別のことを述べ立てた後「はやいてたもれ翁どの」の言葉で結んで庁屋に戻る。

⑧ カイドウクダリ（海道下り）

禰宜の親子の舞で、内輪衆が勤める。息子の面と親父の面があり、親父褒め・お年玉を与える・お年玉のお礼を申す舞などがある。若者の面を付けた禰宜（子）と鈴、扇を手にし、棒を腰に差した親爺（親）が、都から海道を下ってきたところで、見物人と掛け合

いをする。年の初めに当社と村人を祝福する狂言仕立てになつており、問答役の問いに答えて「おんたらたらたら」などいって、担いでいる布袋の口をあけて宝物をあちこちに撒くような所作を伴う。

⑨カンバ（神婆）

クンノ舞（君舞）ともいい、婆の女面をつけた者・爺の面をつけた者・娘の女面をつけたものとの三人で構成される。爺婆が抱き合っているところへ娘面をつけた女が邪魔をしに飛び出し、二人の周りを回る。娘は「伊勢国渡合郡禰宜の娘 神婆舞 ったり 舞ったり」と唱える。爺と婆が抱き合つて多少エロティックに見える所作を伴うのは、年頭にあたり豊作を願う予祝の意味を含んだ舞と言える。ただし、娘の「伊勢国渡合郡禰宜の娘 神婆舞 ったり 舞ったり」の詞章は、ムラの人々にも意味は分からなくなっている。また、娘の仮面は能の若い娘のような洗練されたものではなく、どちらかといえは滑稽な顔に見えるもので、つけている衣装によって若い娘であることが分かる。

⑩テング（天狗）

鬼舞ともいい、これを新野の人々は「鬼様」あるいは「天狗^{てんこう}」と呼ぶ。全身赤ずくめの衣装に鬼の面をつけている。斧を持った一の鬼 太郎、両槌をもつた二の鬼 次郎、片槌をもつた三の鬼 三郎の三匹の鬼と禰宜衆が問答をして、鬼が負けて庁屋に入るといふものである。鬼舞の鬼の口に朝日（二月一五日朝）が当たるように祭りを進めるのが良いとされている。なお、鬼は愛宕山の犬天狗・比叡山の小天狗・四十八天狗の荒者という設定である。問答をして最後に鬼は負けて庁屋に入るといふ構成を見ると、山ノ神がムラの祭りにやってくるという要素と修正会の鬼追いの要素が混在した構成になっている。

⑪ハチマン（八幡）

駒舞ともいい、八幡の面をつけた神が駒を乗り鎮める。ムラにたたる獣を神が鎮めるという話になっている。しかし、どちらかといえは鎮める八万の面は強面で、鎮められる駒の方はないともひ弱なコマという印象を受ける。

⑫シズメ（鎮め）



写真18 カンバ



写真19 天狗



写真20 ハチマン



写真21 ハチマン

八幡の鬼化したものが駒の代わりに獅子を乗り鎮める。さまざまに荒ぶる神様を鎮め、また獣害を鎮めるといわれている。八幡のモドキと思われる。八幡に比べるとこちらの面のほうが納得できる形のものになっている。獅子は悪霊を具現化したもののように、一般的な獅子舞の獅子とは異なり、かなり平面的な獅子である。また、三隅治雄によれば三信遠の他地域で見られるものは、鬼が神人に追われて退散する形で祭りが終わるが、新野では他の地域で退散させられる鬼が悪霊を追放する神となっていると解説している。なぜ、新野だけがそうなっているのかは不明である。

⑬カジ（鍛冶）

面をつけた親鍛冶とバンコの二人がお互いに怠け者であることをのしりあうが、旦那衆のとりなしで最後に仲直りをする。そこへ女面をつけた鍛冶の娘が出て来る。娘は親鍛冶とバンコの周りを回り、庁屋へ入っていく。後を追ってバンコも庁屋へ入っていく。その後を追って親鍛冶も行ってしまう、鞆だけが残るので世話役が片付ける。

⑫までは、いずれも新年の予祝的要素や呪術的要素の強い演目となっているが、⑬はまったくの茶番狂言である。古い記録に



写真22・23・24 カジ

はこの演目はなかったといわれ、弘化五年に初めて登場しており、三隅治雄を初めとする研究者たちは、⑫までの神事が終わった後に祭りの余興として行われたものではないかと述べている。

⑭タアソビ（田遊び）

鍛冶の終わりがらに大松明の燃え残りの横にコモを置き、そこに祭りで使用した太鼓を据えてその上に五穀を包んだ稲束や餅を置き、「田遊び」の詞章を唱えて鍛冶が終わるのを待つて田遊びも終わる。舞はなく、田遊びの歌ぐらを唱える。井掘る事・あて払いの事・あて打ちの事・蔵をもうける事・鍬揃て雇

人の事・田内の事・畦を塗る事・草取りの事・二番草を踏む事・代ならす事・水をかけて清ます事・糶をまく事・水口の水・水干鳥追いの事・田植雇人の事・かん苗ならびこせせりの事・田植神揃の事・小せせり鎌をとぐ事・稲付の事といった稲作の過程を並べていく。

さまざまな神を迎えムラを人々を寿ぎ、そして今年の豊作を願い、昨夜から行われた雪祭りは、寒い・眠い・煙い夜中のクライマックスから一五日前朝、七時から八時ごろようやくすべて舞が終わわり、見物の人々も家路へと向かう。なお、この祭りにとつては、見物人は単なる見物人ではない。見物人も祭りの

大いなる参加者であり、村人はそれをよく承知している。舞いつかれた舞人に掛け声をかけて励ましたり、舞い方にも注文をつける。「そーれー」などの掛け声はもちろん、「もつと足を上げろなど」といつて場を盛り上げるのが見物人の役割でもある。特に年配者で舞人の経験者は、ところどころで、励まし・注意を与えて、祭りを盛り上げると同時に、「正確」な伝承を残そうと意識している。また、舞人も、これが神事であり自分は仮面の神を演じなければならないことを十分に意識し、サイホウ・モドキ・キョウマンなどは、しごく厳かに真面目にその役割と取り組んでいるように見受けられる。かつて、折口が「写真を撮りたいからもう一度……」と言つて、ムラ人たちの矚覚を買ったというが、余所者である私たち見学者は祭りの雰囲気壊さぬよう、邪魔にならぬよう心がけることは勿論であるが、あくまでも神事であり、演じている人々は自分が神となって演じていることが理屈なしに伝わってくるところが、この祭りの醍醐味となっているのであろう。そうであるからこそ、毎年このようにこの祭りにかようマニアも生まれる（研究者の中にも毎年このように訪れる人も多い）。

同じような祭りは韓国にもあり、特に安東河回村の仮面劇や

江陵の端午節が有名である。次節では、韓国における仮面を用いた祭りを紹介し、雪祭りと若干の比較を試みたいと思う。

（ただし、紙幅の関係で以下は次号に続く）

註

（1）田耕旭「韓国仮面劇」野村伸一監訳 李美江訳 法政大学出版局二〇〇四年一〇月 一〇頁

（2）二〇〇八年一月二〇日から二〇〇九年一月二四日まで開催された三井美術館の「寿ぎと幽玄の美」には、室町期から江戸時代までの能面四面が展示された。三井記念美術館学芸課長清水実氏は、伝孫次郎作女面の「おもかげ」について、「照らす、曇らす」といつて、明かりに照らして下から見た感じは優しく鷹揚とした感じに見える、おでこのほうからの視線で見ると、目がつんとした妖艶な感じになる、とその見る角度による表情の違いを説明している。『週刊読書人』第2770号 二〇〇九年一月九日

（3）数年前の狂言ブームによって、狂言は多少身近なものになったが、能はやはり限られた人でなければ、そうそう鑑賞する機会はない。因みに筆者も十年近く前に羽衣を見て以来、能にはトンとご無沙汰である。ただし、能と一体となった謡曲は、長野市周辺地域などで冠婚葬祭の折の酒宴で、杯のやり取りをする際の「お肴」として盛んに謡われていた。そのため義父は十数年前病で倒れるまで、正月二日になると歌い初めといつて、謡曲の幾つかを謡っていた。家によつては現在でも行う家があるが、二十年ほど前から次第に杯のやり取りがされなくなつていく。詳細は拙稿「北信流をめぐる人々のきずな」『長野市誌』第十巻 長野市

一九九八年二月参照

(4) 因みに阿南町に接する地域には、同時期に以下のような祭りが伝承されている。

南信濃村

上村

上島白山神社	二月 第一土曜日	上町八幡社	二月一日
小道木熊野神社	二月 第一日曜日	中郷八幡社	二月三日
八日市場日月神社	二月八日	中立稻荷神社	二月八日
木沢正八幡神社	二月一〇日	下栗拾五社	二月一三日
和田諏訪神社	二月一三日	程野諏訪神社	二月一四日
八重河内尾野島正八幡神社	二月一五日	天龍村	
須澤宇佐八幡神社	二月一六日	坂部大森山諏訪神	一月四日
南和田大町天満宮神社	二月二三日		

このうち、天龍村坂部の冬祭りは新野の雪祭りとよく似ており、坂部の冬祭りのほうが古い形式を伝えているとも言われている。

(5) 拙稿「便所神と家の神」『信濃』三一巻一号及び『新野民俗誌稿』長野県史刊行会民俗資料調査委員会 一九七八年三月参照

(6) 折口が初めて雪まつりを見学した時、最も重要な神事とされている競馬(きょうまん)の舞を終えてお馬役が支度部屋に引っ込んだところを、写真を撮るから「もう一度やってみてくれ」と頼んだ。しかし、「どの者だか知らないが、一度入った馬が二度顔を出すことはない。見せ物じゃないぞ」と地元の人々にしかられてしまった。地元の人々は単なる民俗芸能としてこの祭りを行っているのではなく、神事そのものと認識してこの祭りが伝承されていることに気づかされる。折口は雪まつり狂いといわれるほどたびたび新野を訪れたといわれ、調査の折にも「どこそこの家の門口で腰を下ろして、祭りの行列を待っていた」などといっ

た話を幾つか聞くことが出来た。

(7) 内輪衆とは宮司の下にいて祭りの進行役を司る人々の事を指す。かつては、伊東家につながる人々の集団で構成されていた。現在は神職と氏子総代がこれに当たっている。このほか、上手衆と呼ぶ集団があり、雪祭りの神事全般に責任を持ってあたる人の集団をいう。上手組には東西の二組があり、旧くは八名ずつの計一六名で組織されていたという。大正ごろから人数を増やし、現在は東上手組五一人、西上手組五〇人で構成され、この中から当番で頭人を選んで計四人で祭りを勤めるようになった。東上手組を本座・西上手組を新座と呼んでいる。

(8) 折口信夫「雪祭りの面」『民俗学』一九二九年によれば、このときの様子を「ろうそくのほのかな空の中でそれを見ていると、古代の古代、あるいは日本の外のどこかの土地の死者のマスクに毎年新しい生命を与えるための技術の名残のよう」であると述べている。また、在る年火事になって面が焼けてしまい、ムラ人が集まって新しい面を作ることになった。誰がどの面を作ったかムラ人は知っているのだが、知らない顔をしている。その上、「不思議なことに村の人はどの面も昔の面に書き写して、中には自分が作った面に対してもそう言っている。」村人がひそひそとささやくのを聞いているとなんともいえない気持ちになり、面の中に秘められている「古風な神秘感」をまざまざと感じたとも述べ、仮面が単なる顔を隠すだけの道具ではなく、面をつけることによって神そのものになること、及びその仮面を作る神秘性を折口は述べているのである。

(9) 伽藍様は伊豆神社本殿にむかって右手奥の山の上(崖上ともいうが崖というほどの場所ではない)に祭られている。あらゆる性格を持つ神とも言われ、祭りが始まるに先立って本祭りの邪魔をしないように祭るの

だと説明するムラ人も多い。伊豆神社の守り神だとも言われる。本田安次「語りと舞」「雪祭り」三隅治雄・中村浩編 昭和四四年三月 東京堂出版 一四九頁 『新野民俗誌稿』長野県史刊行会民俗資料調査委員会 一九七八年三月等参照

(10) 翁の詞章 「稲村がそろって まいりつどふ とびかな」稲村塚に種おろし たねおろし」「斯る 久しき御当社 御殿に上り これも翁がことにて候」などという。詞章は順次進んで行き、この詞章のメインである宝数えとなる。「伊頭の御社の宝物にとりては、火を取る玉と、水を取る玉と……」と喋って宝物を数え上げ、最後は「万歳楽 万歳楽 千代御万歳楽」と唱えて終わる。

図版出典一覧

- 写真 1 www.nohbutai.com/contents/05/06ha/1hagoromo.htm 246
写真 2～5 noh-uratake.com/photo/010/index.html 246
写真 6 歴史民俗資料館 阿南町ホームページより
写真 7～17 倉石美都撮影 二〇〇七・一・一四～一五
写真 18～20 www.yuuga.jp/yoshi/matsuri/08/05nino/nino.html
写真 21～24 senshohamadahp.jinfoseek.co.jp/ninoyukinaturi-top.htm

図 1～4 猪切智義「雪祭り」『新野民俗誌稿』註(5)に同じ